

坪井川の川まちづくりにおける地域社会の協働過程に関する研究

熊本大学工学部 学生員 ○前田将伍
熊本大学大学院 学生員 岩田圭佑

熊本大学政創研 正会員 田中尚人
熊本大学大学院 学生員 神島一也

1. はじめに

かつて坪井川は、熊本城の内堀を形成し、舟運路として、市民の生活に密着した川だった。しかし河川改修、道路の整備が進み、坪井川は中心市街地において目立たない存在になっている。現在、城下町くまもと再生への市民の関心が高まり、水辺の活性化が期待され、地域社会の協働が必要であると言われている。

本研究の目的は、川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察することである。具体的には、近年の川まちづくりにおける地域社会の活動の変遷を整理し、グループ・ダイナミクス理論¹⁾ (以下 G・D理論と略) を援用して可視化する。さらに、地域社会の活動を協働という視点から分析し、協働に対する知見を得るものとする。

2. 地域社会の活動の構成

本研究の対象地である坪井川は熊本城の城下町を流れている。熊本城は2008年に築城400年を迎え、さらに九州新幹線が2011年に全線開業となる。これらを契機に複数のまちづくり団体が発足し、活動を行っている。その結果、桜町、新町、古町地区における川まちづくりは多様化、複雑化している。本章では対象地で起こっている活動について整理し、変遷を追った。

(1) 地域社会の定義

本研究では地域社会を「地縁関係に基づく集合体(市民、行政、アソシエーション)が形成する仕組みや関係性の総体」と定義する。

- ・市民：地域住民のみでなく、NPO、出店者等
- ・行政：国、県、市に属している地方公共団体
- ・アソシエーション：共通の目的や関心をもつ人々が自発的につくる集団や組織のこと

このように地域社会を定義し、集合体を分類することにより、目視することのできない地域社会の構造を読み取ることができると考えた。

(2) 活動の変遷

地域社会の活動には継続的なものと単発的なものがある。そこで、2000年から、2010年までの熊本日日新聞²⁾に記載されている活動を中心に整理した。(表1)

桜町、新町、古町の3地区で調査したところ、共通して2003年付近から活動が活発に起こっている。これは、同年4月に行政が熊本城本丸御殿の復元に着手したことに伴って市民やアソシエーションのまちづくりへの意欲が高まったからだと考える。また、他の二つの地域に比べて桜町は坪井川の中での活動が活発である。これは桜町から川を眺望でき、川への意識が比較的高いからだと考える。

表1 活動記録

活動日付	桜町		新町		古町	
	活動団体	活動名	活動団体	活動名	活動団体	活動名
2000						
2001						
2002						
2003	熊本元気実行委員	武蔵ダックレース	熊本市教育委員会	テレビ交流会坪井川の学習		
2004	ルネッサンス さくらまつり実行委員 ルネッサンス	発足 さくらまつり開始 みずあかり開始	明八橋お月見会実行委員 一新まちづくりの会 熊本駅都心間協働のまちづくり協議会	橋のお月見会 九州新幹線全線開業に向けたW.S 発足		
2005	さくらまつり実行委員 ルネッサンス 精霊流し市民の会 熊本城下のまちづくり協議会 ルネッサンス	桜町さくらまつり、桜の植樹 坪井川園遊会開始 精霊流し開始 発足 坪井川舟下り開始	熊本駅都心間協働のまちづくり協議会 熊本駅都心間協働のまちづくり協議会	九州新幹線全線開業に向けたW.S 坪井川の川遊びなど事業計画	古町小学校	鯉の放流
2006	慶徳校区第一町内自治会 自衛隊、大学生、市民 ルネッサンス 新幹線くまもと創りプロジェクト	人命救助訓練 みずあかりの竹を伐り出す 坪井川活性化懇談会 坪井川の川下り	五節供の会	鯉のぼり	五節供の会 五節供の会	雛人形 鯉のぼり
2007			新町、古町地区の商店 坪井川に鯉のぼりをかけよう会	案内マップ「城下町きゃあめぐり」 鯉のぼり		
2008	熊本城下のまちづくり協議会 慶徳校区第一町内自治会 ルネッサンス、市 ルネッサンス	坪井川の浄化 坪井川の清掃 熊本城築城400年祭 舟運復活推進会議				
2009			熊本大学 一新まちづくりの会	くまもと城下のまちづくり絵図 立ち上がり花壇	熊本城下のまちづくり連絡協議会	発足
2010						

3. 地域社会の活動の可視化

地域社会にはさまざまな活動があり、複雑であることがわかる。(表1)

本研究で採用するG・D理論は集合体を基本的に動く存在、変化していく存在とし

て捉え、その動態を記述できるモデルである。ここでいう動態とは集合体の活動である。活動は主体、目的、集合体という基礎要素に、道具、ルール、分業を加えることにより、(図1)のように表すことができる。さらに、G・D理論を援用して、各活動の主体、集合体、目的の関係性や頻度に着目し、坪井川の川まちづくりの基礎要素を(図2)のように表すことができた。

可視化した結果、発足している活動は、年を追うごとに環境や景観等を配慮した活動に近づく傾向があることが分かった。また、年に一回の活動が多く見られ、その多くが持続している活動であると言える。

4. 地域社会の協働過程の分析

本章では3章で可視化された川まちづくりの活動に関して「道具」「分業」「ルール」を分析することにより、地域社会の協働過程を明らかにする。

(1) 地域社会の活動の繋がり

協働過程を示した例として、2004年10月に始まった「みずあかり」と、2008年3月に行われた「坪井川の洗浄」のモデルを作成した。(図3)

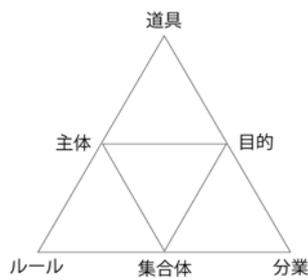


図1 G・D理論モデル

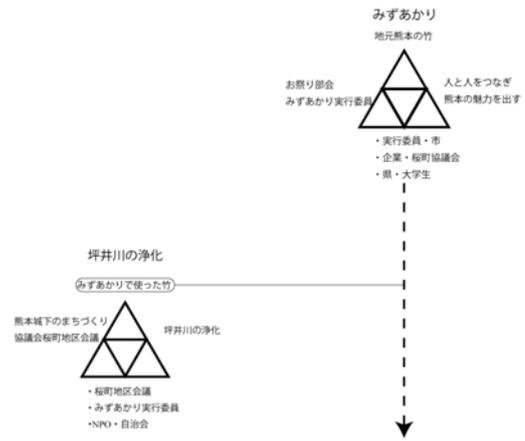


図3 地域社会の協働

(2) 地域社会の協働過程に関する考察

「坪井川の洗浄」では「桜町協議会」が主体となり活動している(図3)。ここでは道具を「みずあかりで使用した竹を用いる(廃材利用)こと」で「みずあかり実行委員」が集合体に加わり、さらには「NPO」や「自治会」も集合体に入り、協働が形成されている。

5. おわりに

本研究は、坪井川の地域社会における活動の変遷を整理し、可視化を行うことにより、地域社会の協働に必要な要件を明らかにした。

[参考文献]

- 1) 杉万俊夫他：コミュニティーのグループ・ダイナミックス、京都大学学術出版会、2006
- 2) 熊本日日新聞社：熊本大学附属図書館データベース、熊本日日新聞、2000-2010

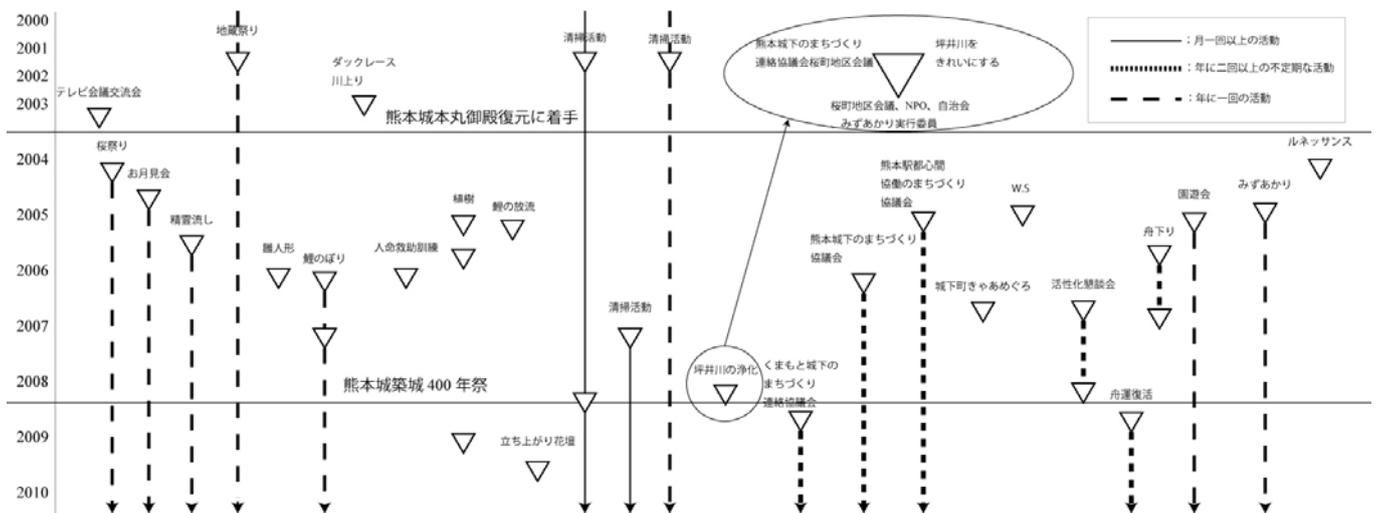


図2 活動の可視化